



花園大学

V.11 Sep. 2022

先生のおすすめ図書

先生より学生の皆様に向けてご推薦頂いた本のご紹介です。
推薦コメントを添えて図書館1階の「おすすめ図書コーナー」に配架しております。
貸出可能ですので、是非ご一読ください。

仏教学科 中島 志郎



『臨濟：外に凡聖を取らず、
内に根本に住せず』

衣川賢次著
臨川書店 2021.8

<請求記号>
189.27/To17/8

『唐代の禅僧 臨濟』『新国訳大蔵經 臨濟録』は、今春、退任された著者の、臨濟及び『臨濟録』をめぐる禅学研究の集大成といえる。この浩瀚の二著は、臨濟その人にとどまらず馬祖以降の四家を中心とした唐禅の大きな俯瞰図を提示し、思想研究の指針を示す前者と、一方、テキストの精緻な読解である『臨濟録』訓注本としての後者という役割分担を見せるが、ともに著者の該博な中国語学の知見と中国の研究動向まで惜しげもなく投入されて、中国禅宗の本流をめぐる最先端の研究成果となっている。論点は多岐にわたるが、果敢な挑戦の象徴的な一編としてぜひ紹介したいのが、鈴木大拙の論評である。禅学の巨人鈴木大拙を過去のひとにせねばならない、生誕百五十年を経て、確かに誰しも見直しの機運を了解しているが、その大拙批判は、いったいいかに可能なのか。いささかの徒労感とともに、たしかに誰かが弔辞を読まねばならない。

この課題に答える著者の姿勢は、大拙批判とは、つまり禅宗と禅思想全体の理解の刷新と別ではないことの、文字通りの論証の実践であった。大拙批判は大拙を批判的に克服した「真正の見解」つまり新たな禅の理解の提案をもってのみ可能であるという地道な確認の道程そのものだった。この巨岩を覆さんばかりの力技が、なにか新たな禅学の奔流を生む決壊の一撃になる予感がするのはわたくしだけではないだろう。臨濟と臨濟録研究の向後の基準本である。



『六祖壇経;臨濟録』

衣川賢次 訳注
大蔵出版 2019.10

<請求記号>
180.91/Sh64/2-1-7



『大徳寺伝来五百羅漢図』
国立文化財機構奈良国立博物館、国立文化財機構東京文化財研究所編
思文閣出版 2014.5

仏教学科 西谷 功

<請求記号>

E722.25/N51

栄西や道元などの禅僧たちは寺院でどのような暮らしをしていたのか？このような点に関心を持たれる学生さんにオススメするのが本書です。京都・大徳寺に伝来する五百羅漢図は、今から約 800 年前の中国浙江省で描かれたことがわかる貴重な仏画です。この仏画は、羅漢たちの僧院生活を通して、じっさいにこの地域で活動していた僧の生活が視覚的にわかります。そして、このような中国の僧院生活文化を日本にもたらしたのが、彼の地に留学した栄西や道元たちでした。つまり、この羅漢図は、鎌倉時代の禅僧の生活・習慣・文化などを考える上でもとても重要な絵画資料といえるのです。ぜひ手にして、かれらの暮らしぶりを垣間見てください。



『カメントツの漫画ならず道
1～2』

カメントツ著
小学館 2017.4

日本文学科 秦 美香子

<請求記号> Q726.1/Ka34/1～2

『こぐまのケーキ屋さん』などの作品がよく知られているカメントツさんですが、Web マンガ黎明期より、取材に基づいたルポマンガを描かれていました。この『漫画ならず道』は、『名探偵コナン』の作者である青山剛昌先生など著名なマンガ家さんたちや、印刷所・製本所といった「マンガ本」が作られる現場への取材・インタビューに基づいて描かれており、マンガの現在について笑いながら学べてしまう内容です。ぜひ楽しんでください。



『ここにはないもの:新哲学対話』

文 野矢茂樹 / 絵 植田真
中央公論新社 2014.4

仏教学科 松本 直樹

<請求記号>

中公文庫/の-12-4

目次は以下の通り。

1. 「人生は無意味だ」って、どういう意味なのだろう
2. 十年前のぼくも、ぼくなんだろうか
3. ことばで言い表わせないもの
4. 自分の死を想像することはできるか
5. 未来は存在しない？

昔ながらの哲学の基本問題ばかりで、もっと難しい言葉(「自我」とか「言語」とかそんな)で言おうと思えば言えなくもないですが、この本ではみんな、こんなふうにとっても柔らかい言葉で書かれています。内容も、ちょっとファンタジーっぽい世界(ムーミン谷みたいな)と、その世界にお似合いの登場人物 2 人がのんびり会話する、という感じで進んでいきますが、とっつきやすさのわりに中身は高度ですから、読みやすいからといって読みとばさず、ゆっくり、ときには本を置いて考え込む、といったことを省略せずに読んで下さい。哲学的に考えるってこういうことか、というイメージが、とてもはっきりもてるようになると思います。

個人的には 4 番目の「死」についての議論に関心があります。全部に賛成ではないのですが、みなさんはどう思いますか。



『青春を山に賭けて』

植村直己著

文藝春秋

新装版 2008.7

<請求記号>

文春文庫/う-1-6

日本文学科 神田 邦彦

小学三四年のころ、学校の図書室で、いろんな本を読みあさっていた時、もっとも心ひかれたのが、登山家・冒険家として知られる植村直己さんの本で、さっそく父にほしいとねだって買ってもらったものです。それ以来、愛読書になって、小、中、高と、何度読み返したかわからない本ですが、話は著者が大学一年生の春、軽い気持ちで大学の山岳部をのぞいたところから始まります。無理矢理山岳部の一員にさせられ、やがて山の魅力に取りつかれ、世界の山に登りたいという夢を叶えていく、そんな著者の若いころの回想なのですが、どう生きるべきか悩んでいた自分に、誰に何と言われようと、自分のやりたいことをやる、自分の夢に向かっていく、そんな生き方がしてみたいと、そういう思いをはじめて持たせてくれた本です。



『室町は今日もハードボイルド：
日本中世のアナーキーな世界』

清水克行著

新潮社 2021.6

<請求記号>

210.4/Sh49

日本史学科 生駒 孝臣

室町時代研究の第一人者である著者が、現代とは異なる価値観・常識が通用していた中世社会の様相を、悪口や婚姻、落書き、呪いなどさまざまなトピックを通して、著者自身が日々感じる現代と中世の相違という観点から叙述した全16章のエッセイ。各章は、著者が若い頃にインド旅行で経験した山賊事件と中世の海賊・山賊との類似性や、スタバやドトールなどショップ毎で提供されるコーヒーのサイズの相違と中世の椀のそれとの共通点など、現代の身近な事例から説き起こし、それに関する中世社会の諸事象について実例をふまえながらわかりやすく、ときにはくだけた口調で語られる。タイトルに「室町」を冠するものの、室町時代だけでなく鎌倉から戦国時代までの中世全体がカバーされている。そのため、これから中世史を本格的に学ぼうとする人、これまで中世という時代を敬遠してきた人、または日本史そのものに関心を持てなかった人も楽しみながら日本史・中世史への理解が深められるおすすめの一冊である。

日本史学科 菅 修一



『平瀬作五郎の調査・研究』

福井県教育総合研究所教育
博物館編
福井県教育総合研究所教育
博物館 2022.2

<請求記号> G289.1/F76



『「イチヨウ精子発見」の検証： 平瀬作五郎の生涯』

本間健彦著
新泉社 2004.11

<請求記号> 289.1/H85

平瀬作五郎はイチヨウの精子を発見するという世界的な研究を行い、のちに帝国学士院から1912年に恩賜賞を授与されている(本書 p.10)。なんとその平瀬は我が花園学園(花園学林→花園学院→花園中学校、現在は花園高校)で教員として活動していた。「僧侶に運動など不要だ」という批判に対しては、体が丈夫でなければ何もできない、と柔道部やテニス部の顧問を引き受け、テニスに関しては授業が終わってから夕方まで生徒とともに汗をながした、との記述がある(本書 p.9-10)。花園高校に平瀬の顕彰碑があること、2022年に新しい顕彰碑を建立する計画があることを本書の教示により知った(本書 p.22)。なお、本間健彦著『「イチヨウ精子発見」の検証：平瀬作五郎の生涯』(新泉社 2004年)が詳しく読みやすいかもしれない。あわせて紹介する。

日本史学科 菅 修一



『カルトの記憶』

山下ユキヒサ著
新風舎 2007.7

<請求記号> 169.21/Y44

2022年今年夏、注目を浴びることになった「世界平和統一家庭連合(旧統一教会=旧統一協会)」。彼等に取り込まれた青年がキリスト教会の牧師によって「真理」に気付かされ統一協会を離れていくまでの回想手記である。牧師が伝えようとしたことは『聖書』に基づく「真理」を誠実に見つめようとするということであった。私の言うことこそが「真理」であるという人は屡々いる。しかし時としてその中ににせ預言者(マタイによる福音書7章15節)が潜んでいる。にせ預言者(カルト宗教や悪徳商法の勧誘なども該当するだろう)はキャンパスや街にいるかもしれない。彼等にせ預言者は自らが何者であるかを隠して接近してくるという。注意しなければいけない。「真理」とは何か、自分なりに掴んでいれば、にせ預言者を見破れるであろう。本書を契機に紛うことなき「真理」とは何か考えていただければ幸いである。



『すき間の子ども、すき間の
支援：一人ひとりの「語り」と
経験の可視化』

村上靖彦編著
明石書店 2021.9

<請求記号>

369.4/Mu43

社会福祉学科 久保 樹里

子どもや親が抱える困難はそれぞれに異なり、個別のストーリーによって初めて感じ取ることが出来ます。

発達障害傾向の子どものグループ、放課後デイサービス、子ども食堂、社会的養護などの現場において、統計からは見えにくい困難と支援のダイナミズムを子どもや親、支援者の「語り」を軸にして、可視化する試みに挑戦した本です。私も児童養護施設が崩壊寸前にまでいたった経緯、そこから子どもとの信頼関係を取り戻していくリアルを職員の語りから描いてみました。



『就活のまえに：良い仕事、
良い職場とは？』

中沢孝夫著
筑摩書房 2010.1

<請求記号>

ちくまプリマー新書/126

社会福祉学科 安田 三江子

良い仕事、良い職場とは、良い苦勞をさせてくれる職場である。良い苦勞は人を成長させ、人の魅力をひきだす。そこから生じる人間関係もまた豊かなものであろう。それでは、どうすれば良い苦勞をさせてくれる職場と出会えるのだろうか。会社や組織にはカラーがある。自分とカラーのあう職場が良い苦勞をさせてくれる場所である。さらに、それでは自分のカラーはどのようにしたら出せるのだろうか。中沢氏は一冊の気にいった本と出会い、その本を通した筆者との対話からはじまるという。本を読むことが、そのひとの本来もつ魅力をひきだすのである。中沢氏の主張は明瞭である。「良い仕事、良い職場とは、実は図書館から始まる」つまり「図書館に行こう！！」ということである。



『組織の中の決定理論』

高橋伸夫著

朝倉書店 1993.9

<請求記号> 336.1/Ta33



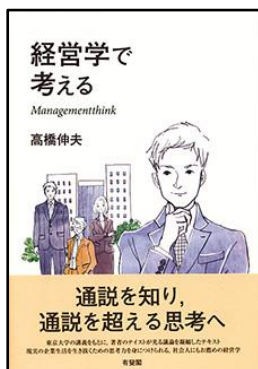
『できる社員は「やり過ごす」』

高橋伸夫著

日本経済新聞社 2002.7

<請求記号>

日経ビジネス人文庫/た-3-1



『経営学で考える』

高橋伸夫著

有斐閣 2015.9

<請求記号> 335.1/Ta33



『大学4年間の経営学が10時間でざっと学べる』

高橋伸夫著

KADOKAWA 2019.1

<請求記号>

角川文庫/た-85-1

社会福祉学科 安田三江子

私たちの暮らしにはさまざまな問題がおきる。一般には、しっかりとものごとに向き合い、熟慮の上での対応が重要といわれる。しかし、現実的には、問題を「やりすごし」たり、やりすごす以前に問題の所在の認識すらせず、「みすごし」たりすることも多い。イメージはよくない。しかし、悪いことかという一概にそうともいえない。

もちろん、人権やいのちにかかわることにやりすごしやみすごしがあってはいけない。まず、これは大前提である。ここは強調する。しかし、これ以外のこと、すべてに対応をしたら、人間には思考力にも行動力にも限度があり、私たちは身が持たなくなってしまう。一方、そのときに、気に留められることもなく、たいしたこととも受け取られず、「やりすごし」でほったらかしにされたことから、時を経て宝物が飛び出すこともある。「思ってもいなかった新技術の開発」や「世紀の古文書の発見」の背景にも、実は人びとの「やりすごし」や「みすごし」の連続がある。

しかし、このやりすごし、単なる偶然とガサツの組み合わせの結果にもみえるが、「ほっぽる」という高度な行動をしているともいえる。捨ててこの世から消さなかったという判断も根底にはある。高橋伸夫(2002)の「できる社員はやり過ごす」にこのあたりのことが書いてある。意識されない高度な行動力がこの社会には存在する。

それでは、このような行動力は、いかにしたら身につくのであろうか？まず、さまざまな体験があげられるだろう。実際の豊かな体験は必須である。しかし、人間が実際に体験できる範囲には限度がある。ならば、どうしたらよいのだろうか？手近なことかというと、本を読むことで、別の体験をすればよい。長年テレビに出続ける芸人さんたちにはすごい読書家の人が多いという。なるほど、うなずける。

学生の中には、内なる野心として、芸人をめざしているひともし少なからずいる。「ほっぽる」という高度な行動をするために、そして、密かに芸人をめざすために、本を読もう。つまり、図書館にいこう。

なお、高橋伸夫の研究は、やや難易度が高い。しかし、面白いのでお勧めである。



『悩む心に寄り添う: 自己否定感と自己肯定感』

高垣忠一郎著

新日本出版社 2021.8

<請求記号>

臨床心理学科 岡ひろみ

146.8/Ta29

「競争社会に一応の終止符を打った大学生」に是非読んで欲しい一冊です。「今日の競争的な学校環境や非人間的な労働環境の中で、生きづらさを感じている子供や若者たちの根っこには」「自分が自分であって大丈夫という感覚の欠如がある」。こうした人たちが、「部分的ないいところではなく」「存在丸ごとを肯定」していけることで、「あるがままの自分でいて大丈夫」と思えることが大切です。また「あるがままの自分」でよいと思えると、「自分が好きになり」「あれもしたいこれもしたいと思えるようになる」と記されています。

今は、「過度に同調圧力」が求められる「コロナ禍」にあり、さらに生きづらくなっています。こうした時代をどう生きていけばよいのか。この本とともに、ゆっくり考えてみてください。「人に迷惑をかけてはいけない」ではなく、「自分の弱いところを出しても良い」「許してくれてありがとうと思えること」の方が大事ということばも示唆的です。大学教授であり心理カウンセラーでもあり、数多くの著書がある高垣さんの最新書。「行きつ戻りつしながら」一緒に考えていきましょう。



『認知症ケアのための心理アセスメントと心理支援: 高齢者の心理臨床ハンドブック』

小海宏之、若松直樹

川西智也編著

金剛出版 2022.6

<請求記号>

臨床心理学科 小海 宏之

493.75/Ko64

臨床心理学科教授の小海も編者として関わった、高齢者の心理臨床を基礎から応用まで学ぶのに適したテキストです。わが国は超高齢社会を迎えて認知症を中心とした心の疾病や課題を抱える高齢者の増加が大きな社会問題になりつつあります。そこで、公認心理師を目指す学生はもとより、公認心理師を目指さない学生でも、高齢者の心理臨床に興味のある方は、是非、一読してみてください。



『占星術: 科学か迷信か』

H・J・アイゼンク、D・K・B・ナイアス

共著 岩脇三良、浅川潔司共訳

誠信書房 1986.3

<請求記号>

臨床心理学科 丹治 光浩

148.8/E94

行動主義心理学のパイオニアとして超有名なH・J・アイゼンクの著作です。科学的根拠がなさそうということで多くの心理学者が見向きもしなかった占星術に対して、心理学者として極めて真摯に取り組んだ研究をまとめたものです。驚くような結末も用意されています。占星術に興味がある人もない人も一度手に取って読んでほしい一冊です。



『学び舎中学歴史教科書
ともに学ぶ人間の歴史』

子どもと学ぶ歴史教科書の会編
学び舎 2016.10

<請求記号>

児童福祉学科 中妻 雅彦

375.323/Ko21/1~2

私は、小学校社会科教科書(教育出版発行)を30年近く、執筆してきました。主に、6年生を執筆していたので、中学校教科書とのつながりを考えました。中学校教科書は、ゴシック体の活字が一部で使われ、いかにも「暗記」しなさいと言わんばかりの編集になっています。社会科が、「暗記教科」だと思われている原因の一つだと感じています。この「学び舎」の中学校歴史教科書には、ゴシック体がありません。読んで面白い教科書になっています。また、アジアや世界の見方や考え方をはじめ、歴史を考えさせる内容になっています。大学生の教養として、読んでみませんか。



『深夜特急 1~6』

沢木耕太郎著
新潮社 新版 2020.7~9

<請求記号>

教職課程 木村 裕

新潮文庫/さ-7-51~56

「一人旅に出てみたい」—— 高校生のときにこの作品を読んだ私が感じたことでした。そして大学生になった私は、長期休暇を利用して、ささやかながらも一人旅に出るようになりました。旅を通してさまざまな人々やものと出会い、自分自身が「あたりまえ」だと思っていたことが揺さぶられる経験、そしてそのおもしろさと大切さへの気づきは、現在の私の研究や授業などにも大きな影響を与えています。



『音とことばのふしぎな世界：
メイド声から英語の達人まで』

川原繁人著
岩波書店 2015.11

<請求記号>

教養教育課程 有吉 淳一郎

408/I95/244

みなさんは、「音象徴」という言葉を聞いたことがありますか。これは、音から意味が連想される現象のことを指します。…と言うと、なんだか難しそうですが、普段の生活の中で身近に感じることができます。例えば、「ゴジラ」や「ガンダム」が、「コシラ」や「カンタム」だったら、がっしりとして強そうなイメージではなくなってしまう、そんな感じがしませんか。これはなぜでしょうか。なんだか、可愛らしい、そんな気さえしてしまいます。また、実在しない架空の単語で“mal”と“mil”という2つの語があるとして、どちらかが「大きなテーブル」で、どちらかが「小さなテーブル」という意味だとします。みなさんは、どちらの語が「大きなテーブル」で、どちらの語が「小さなテーブル」だと思いますか。実は実験の結果、多くの人が「malの方が大きなテーブル」と答えたそうです。誰に教えられたわけでもないのですが、どうも私たちは、「aは大きくて、iは小さい」という感覚をもっているようです。不思議な感じがしませんか。

音の話を中心に、面白いトピックが満載です。ぜひ手に取って見てみてください。



『いま授業を変えなければ
子どもは救われない』

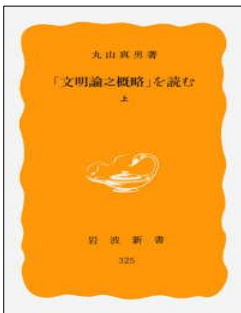
林竹二、遠藤豊著
太郎次郎社 新版 2019.8

<請求記号>

375/H48

教職課程 中 善則

少し古い本ですが、当時大学生の私が夢中になって読んだ本です。学校の先生を夢見る私にとって、本当に学び多き書物でした。感想を著者の遠藤先生に送ったりもした思い出が…。私もこれを機会にもう一度この本を読んでみようと思います。学生の皆さん、感想を伝えに来て下さい。授業の本質について、色あせず、今なお(今こそ)深く考えさせてくれる本です。



『『文明論之概略』を読む
上・中・下』

丸山真男著
岩波書店 1986.1

<請求記号>

080/4-3-325~327

第22代学長 磯田 文雄

『文明論之概略』は、明治8年に福沢諭吉が世に問うた名著である。最大の問題は日本国の独立であり、西洋文明を学ぶのもこのためである。福沢諭吉の精神的気力と思索力がもっとも充実したときに書かれた最高傑作の一つであり、時代をこえて今日なお、その思想的衝撃力を失わない。この名著を丸山真男が我々にひもとく。我々はそこから何を学ぶか。



『奈良で学ぶ寺院建築入門』

海野聡著
集英社 2022.2

<請求記号>

集英社新書/1102D

博物館学芸員課程 高橋 克壽

日本には世界に誇る木造建築があまたある。なかでも、奈良に残る古代寺院の建造物は、私たちを圧倒する迫力と美しさを兼ね備えて何かを訴えかけている。その何かがこの本を読むとわかるのである。本書を手にとりながら、唐招提寺、薬師寺、興福寺、そして東大寺の代表的建築と対話してみたい。博物館の中に大事に展示されてきた文化財とは違ったオタカラの存在とその有り難さがわかるでしょう。

2022 年 9 月

花園大学情報センター（図書館）